

## 形成外科

部長 赤松 順

### 診療体制

大阪医科大学よりの後期研修医師の交代は無く、4月からも、赤松順部長（形成外科機構専門医・皮膚腫瘍外科指導専門医・小児形成外科指導医・創傷外科専門医・日本創傷外科学会評議員・日本褥瘡学会評議委員・褥瘡認定士）、杉田直哉部長（形成外科機構専門医・小児形成外科指導医・創傷外科専門医・皮膚腫瘍外科指導専門医）、木村祐介医師の形成外科 3人体制が維持されました。

### 診療実績

新型コロナウイルス感染症の影響のもと、年間の新患者数は 389 名、入院患者数は 173 名と減少した一年でした。手術件数は、入院手術 330 例と増加、外来手術 183 例と 4 割近い減少でした（表 1）。件数に関して、新型コロナウイルス感染症の影響は入院手術では軽微でしたが、外来手術で大きな影響を受けました。また、麻酔法別内訳は、外来手術では腰麻・伝達麻酔 0 例、局所麻酔 183 例で、入院手術では全身麻酔 280 例、腰麻・硬麻・伝達麻酔 7 例、局麻手術 43 例で、さらに麻酔科管理手術が増加致しました。2017 度より、症例登録が NCD に移行し、報告様式に変更がありました。形成外科疾患データベースより形成外科専門医認定施設要件と過去 6 年間の件数推移を示します（表 2）。前年度に比して V.難治性潰瘍（褥瘡、その他の潰瘍）が 15%増加した以外、何れの分野でも減少しました。当科の特徴である I.外傷（熱傷・凍傷・化学損傷・電撃傷の手術症例、顔面軟部組織損傷、顔面骨折、頭部・頸部・体幹の外傷、上肢の外傷、下肢の外傷、外傷後の組織欠損（2 次再建））が、26%減、II.先天異常（唇裂・口蓋裂、頭蓋・顎・顔面の先天異常、頸部の先天異常、四肢の先天異常、体幹（その他）の先天異常）が 37%減、III.腫瘍（良性腫瘍（レーザー治療を除く）、悪性腫瘍、腫瘍の続発症、腫瘍切除後の組織欠損（一次再建）、腫瘍切除後の組織欠損（二次再建））が 21%減、IV.瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイドが 68%減、VI.炎症・変性疾患（蜂窩織炎、眼瞼下垂、陥入爪、腋臭症など）が 8%減、VIII.その他（性同一性障害、ブラッドアクセス、分類不能など）が 33%減、Extra.レーザー治療が 35%減と、待機可能な疾患の手術減少が目立つ結果となりました。新型コロナウイルス感染症の影響と考えられますが、高知県の自然人口減少、高齢化の影響が進んでいる可能性も有り、対応が必要と考えられます。8 項目中 7 項目の分野の症例があり、規定の 5 項目以上の要件を充足しました。また、8 項目中 9 件以下が、当院では基本的に扱っていない VII.美容（手術）の 1 項目のほか、II.先天異常（唇裂・口蓋裂、頭蓋・顎・顔面の先天異常、頸部の先天異常、四肢の先天異常、体幹（その他）の先天異常）7 件、IV.瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド 7 件で、規定の 3 項目以内の要件をぎりぎり充足致しました。学会、論文発表など学術面での基準も、後述の如く充足致しました。

表 1 年次別入院患者総数と手術件数（過去 6 年間）

	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年
入院手術	286	315	304	301	321	330
外来手術	260	236	207	291	291	183
合計係数	416	433	407.5	446.5	466.5	421.5
入院患者総数	195	229	190	190	193	173

表 2 年次別手術件数の症例内訳 (過去 6 年間)

	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年
I. 外傷 (全身管理を要する非手術例は含まず)	180	171	156	152	198	146
II. 先天異常	9	10	8	12	11	7
III. 腫瘍	149	152	134	169	158	123
IV. 瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド	25	18	14	24	22	7
V. 難治性潰瘍	104	118	120	125	157	180
VI. 炎症・変性疾患	23	34	26	22	25	23
VII. 美容 (手術)	0	0	0	0	0	0
VIII. その他	14	23	34	47	21	14
Extra. レーザー治療	42	25	19	41	20	13
大分類 計	546	551	511	592	612	513

### 当科の特徴

近森病院は急性期特定病院、地域医療支援病院、管理型臨床研修病院、災害支援病院など急性期地域密着型の医療を行っている。形成外科はその中で顔面四肢の外傷や熱傷の治療はもちろん幅広く形成外科診療を行っている。当院の特徴、地域性により、最近では創傷外科分野における治療ニーズが上昇しており、急性期創傷のみならず、基礎疾患を持った慢性期創傷や皮膚・軟部組織悪性腫瘍の増加が顕著である。瘢痕・瘢痕拘縮の治療や創傷治癒に関する高い専門性を生かし、当院の特徴であるチーム医療及び垣根の低い他科との連携を通じて、医師として当然求められる知識、技術、倫理観などを持った一般外科救急臨床医としての資質を持った形成外科医の育成にも力を入れている。今年度は、初期臨床研修医 2 名 3 か月間、指導担当致しました。学外臨床実習は、新型コロナウイルス感染症の影響で実施できませんでした。さらに、高知県消防学校救急科へ講師派遣、特定看護行為研修における創傷管理関係を担当し、実習などを行っています。

例年、学会発表などで、積極的に学術的情報発信を行っていますが、本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響は学会中止が相次ぎ、限られたものとなりました。

### 形成外科外来

外来棟 4 階北側の形成外科 5 診 6 診で主に診察処置、7 診でミニカンファ・患者指導、8 診処置室で Q スイッチアレクサンドライトレーザーによる色素性疾患、外傷性刺青の治療、CO<sub>2</sub> レーザーによる皮膚剥削、腫瘍切除など蒸散治療、ラジオ波による焼灼治療、陥入爪手術 (簡単) などの小手術を行っています。また皮膚排泄ケア認定看護師との連携も密に行っています。

### 臨床研究課題

慢性動脈閉塞症の潰瘍治療に対して、厚生労働省より、条件及び期限付で保険収載されたコラテジェン® (遺伝子治療用製品で、再生医療等製品に区分) に関して、当院は、高度な集学的連携可能な施設としてコラテジェン®による遺伝子治療を許可されました。当科受診時に、適応範囲より重症度が高く、臨床研究課題ではありませんが早期受診勧奨のため情報を提示致します。

コラテジェン®は、ヒト肝細胞増殖因子 [HGF (エイチジーエフ)] (肝臓の細胞増加、血管新生作用があるたん白質) の遺伝子を組み込んだプラスミド DNA (「ベクター (運び屋)」) で、血管が閉塞したり狭窄した場所に注射すると、プラスミド DNA が細胞の中に取り込まれ、HGF 遺伝子から HGF たん白が産生され、分泌された HGF により新しい血管が作られ、血液の流

れが良くなり、潰瘍が改善することを期待する治療です。

## 学術発表・講演会等

### 学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
当科における後期高齢者の皮膚悪性腫瘍手術の検討	近森病院 形成外科 木村祐介、河瀬弘代、杉田直哉、赤松順、北村龍彦 大阪医科大学 形成外科 上田晃一	第 79 回中国・四国形成外科学会  会学術集会	2月2日 広島
維持透析患者に発生した感染を合併した臀部 Tumoral calcinosis の1例	近森病院 形成外科 杉田直哉、赤松順 大阪医科大学 形成外科 上田晃一	第 12 回日本創傷外科学会総会・学術集会	12月10日・11日 徳島

### 講演

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
----	--------------	-----	----

### 論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
特集 外科系医師必読！形成外科基本手技 30 - 外科系医師と専門医を目指す形成外科医師のために- 難治性潰瘍に対する陰圧閉鎖療法	近森病院形成外科 赤松順、杉田直哉	PEPARS 全日本病院出版会	159 : 136-144,20 20
特集 大学では学べない外科臨床 IX.形成外科 1. 爪処置 (陥入爪/爪剥離) Management of ingrown and incurvated nails involving the other disorders.	近森病院形成外科 赤松順、杉田直哉	外科 南江堂	82 (5) : 576-579, 2020